



宮殿2階から望むバロック庭園

Special Features / Civil Engineering Heritage VII The fruit of technology which bring up foundation of culture

# 王室の歴史を伝える「ドrottningホルムの庭園」

## スウェーデン スtockホルム郊外



SOKEI Hiroyuki

特集  
土木遺産VII  
文化の礎を育む技術の結晶(スウェーデン・フィンランド・ロシア・日本)

国際航業株式会社/技術・営業推進本部/事業推進部/事業管理グループ  
物慶裕幸(会誌編集専門委員)

### 1—複数の庭園様式が見られる庭園

ドrottningホルムは、ストックホルム王宮の西方、メーラレン湖上のローヴ島に位置する。湖に姿を映す宮殿は絵に描いたような美しさである。



■図1—平面図

スウェーデン王家の離宮であるドrottningホルムの宮殿、劇場、中国館、庭園はユネスコの世界遺産に登録されている。宮殿の部屋は17～18世紀の装飾で満ち、劇場は18世紀の状態を保存する珍しい例である。中国館はヨーロッパの同様の建築物の中でも最も重要なものと考えられている。

庭園だけで約90ha、東京ドーム19個分の広さがあり、宮殿や森林を含めると127haに及ぶ。庭園は17世紀のバロック庭園、18世紀末の英国庭園、両者の移行期のロココ庭園の3様式が見られ、ヨーロッパ庭園史を振り返ることができる。なぜドrottningホルムには様式の異なる複数の庭園が残っているのだろうか。

### 2—庭園の始まり～バロック庭園

1579年、ヨハン3世は王妃カテリーナ・ヤーゲロニカに木の城を捧げた。地名は王妃にちなみ「ドrottningホルム(王妃の小島)」と呼ばれるようになった。この頃には桜やリンゴなどの果物を植えた庭園があった。



■写真1—メーラレン湖に姿を映す宮殿



■写真2—バロック庭園の水花壇



■写真3—バロック庭園の滝

16世紀のヨーロッパ諸国は、産業と輸出の振興による財政強化や常備軍の整備とともに、官僚制を整えて国王が国の頂点に立つ、フランス宮廷の統治方法「絶対王政」を取り入れていた。そうした中で、フランス宮廷の宮殿と庭園は王の財力や先進性を示し権威を高める施設として、社交や遊興の場として使われた。さらに、宮殿には王族の功績を示す絵画や各国王家の肖像画、神話をモチーフにした絵画が飾られ、王の教養の高さを示す場でもあった。

この当時のフランス王家の庭園を手がけた造園家ル・ノートルが造る庭園は、王の存在を意識させるように構成されていた。その庭園は、宮殿を始点とした軸にそって左右対象に整形された区画が並ぶ特徴から、幾何学式庭園とも呼ばれる。

17世紀になると、スウェーデンではグスタフ2世アドルフの時代に内政を改革し、国外進出することでバルト海一円を支配する大国に成長していた。

1661年にドrottningホルム離宮は未亡人ヘドヴィグ・エレオノーラの所有となり、焼失した宮殿の建築を王室顧問建築士ニコデムス・テッシン(大テッシン)に命じた。大テッシンはル・ノートルが造園したフランスのポール・ピコン城をモデルに、多くの庭園計画案も作成した。1681年に大テッシンが没した後は、ほとんど未着工だった工事を、同名の息子ニコデムス・テッシン(小テ

ッシン)が引き継ぎ、ヴェルサイユなどの庭園を参考に、父の案を発展させて実現したのであった。宮殿と庭園の建設は当時国内最大規模の事業となり、1700年に一応の完成を見た。その後、18世紀後半に増改築が行われ、現在の3階建て220室の宮殿が完成した。

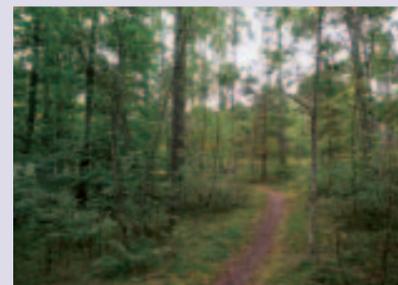
ドrottningホルムのバロック庭園は長さ約700m、幅約170mで、宮殿の西側正面にあり、宮殿から一望できる。各種花壇や滝をつくるために土地を平面化し、大がかりな水利工事が行われた。宮殿側から刺繍花壇、水花壇、ボスケの各区画が並び、4列の菩提樹並木が庭園を囲む緑の壁となっている。

ボスケとは樹木で囲まれた宴や会議に用いた小部屋である。ボスケと水花壇の境にある滝の音は、ボスケに入ると聞こえなくなるよう計算されている。花壇は歩いて会話を楽しむところであった。

現在は芝生に置き換えられている刺繍花壇は、当初は植物模様が表現されていた。刺繍花壇の中央の円形噴水にはプラハから戦利品として持ち帰ったヘルクレス像が据えられ、大国だった頃の名残を示している。

### 3—自由の時代～ロココ庭園

1715年にヘドヴィグ・エレオノーラが死去したあと、孫のウルリーカ・エレオノーラが離宮を相続する。しかし、



■写真4—ロココ庭園の森の小道



■写真5—ロココ庭園のウィングラス型の樹形



■写真6—バロック庭園の野外劇場



■写真7—英国庭園  
 ■写真8(左)—英国庭園のマルス像  
 ■写真9(右)—英国庭園の古代北欧をモチーフとしたゴシックタワー  
 ■写真10—英国庭園のモニュメントホルム

兄で王のカール12世が続ける戦争費用が国庫を圧迫し、焼失したストックホルム王宮の再建も停滞するほど財政は窮していた。1718年にカール12世が没し、ウルリーカが王妃になってから芸術品の収集を増やし、宮殿にカール12世の戦いを讃える部屋を造った。

次の所有者ロヴィーサ・ウルリーカは、皇太子アドルフ・フレデリックとの結婚祝いにドロットニングホルム離宮を贈られ、1744年ここで結婚式を挙げた。ロヴィーサはフランスの文化人との交際があった才女で、豊かな文化的趣味で人々を驚かせた。スウェーデン初の文学文芸アカデミーを設立するなど文化芸術の発展に精力的に取り組み、離宮内に劇場・図書館・ギャラリーを建設した。また、この頃のヨーロッパでは中国ブームが起り、中国風の装飾がもてはやされていた。王となったアドルフは、1754年にロヴィーサに中国館を贈った。異国に思いを馳せるのも庭園の楽しみ方だった。

1750年代にバロック庭園の南側、中国館の周辺にアドルフが自ら計画したロココ庭園が造られた。西洋トチノキ並木を軸に、左右対称に配置された鳥園とあまり手が加えられていない樹林地は、バロック庭園と英国庭園との過渡期の姿を示している。森は松と白樺など北欧で生育する樹木から成っている。菩提樹のボスケなどは1970年代初めに修復されたもので、当時のワイングラス型の樹形が再現されている。バロック庭園のボスケの形はこの頃最終的に決まった。ボスケの一つである野外劇場は、舞台装置を持ちこめるように室内劇場と同じ大きさに造られた。

ウルリーカからロヴィーサの頃となる1719～1772年は、スウェーデン史で「自由の時代」といわれている。対外的にはバルト海の覇権をロシアに譲り、国内では長年続いた戦乱に疲弊し身分制議会在が力を強め、王の権力は制限され絶対王政は廃止された。また、学術は発展したが、汚職・贈賄・買収が横行する凋落と腐敗の時代でもあった。ロヴィーサは王権奪取のためクーデターを計画したが失敗に終わった。

#### 4—グスタフ3世の時代～英国庭園

英国庭園は、曲線を描く水面や園路、非整形に植えら



■写真11—バロック庭園を囲む再生中の菩提樹並木

れた樹木、ゆるやかな草地の起伏が特徴の、散策して見る庭園である。英国庭園は風景式庭園とも呼ばれ、「絵画のような風景」を再現することに始まった。後に美しい風景に物語性を求めたり、見え方によって生じる感情の変化を楽しむものへと発展し、感性を刺激する石碑や廃墟などが置かれるようになった。

英国庭園を建設したのはロヴィーサの息子グスタフ3世である。

グスタフ3世は幼少期を文化芸術の香りあふれるドロットニングホルムで過ごした。幼い頃にフランスの演劇団の公演を見てからはフランス文化に憧れ、自ら脚本を書きただけでなく、演出・出演もした。皇太子時代の1770年をはじめに何度も西欧・南欧に旅行し、ルソーやヴォルテールなどの思想家や哲学者と会った。1771年に王位につくと絶対王政を復活させ、啓蒙専制君主として改革を実行し、腐敗した党派政治による無秩序な状態からスウェーデンを救った。外交面では大国ロシアと宿敵デンマークに対抗するため、親フランス政策をとった。新興市民階層や一般民衆の支持を集めたが、貴族の反感を買い、1792年に仮面舞踏会での暗殺未遂事件で受けた傷が原因で命を落とした。一方、美に敏感で、一代で「グスタフ王朝時代」と呼ばれる文化芸術の開花をもたらした個性的な王であった。

英国庭園の思想は1770年頃スウェーデンに紹介され、グスタフ3世は1777年に離宮を相続してすぐに計画を始めた。英国庭園への最初の訪問は1777年ロシアのツァ

ルスカイセローで、帰国後に建築家アーデルクランツと蛇行する水路を含めた庭園の計画案を作成した。美に敏感な王が新しい流行を追ったのかもしれないが、野外パーティで人々に庭園を自由に散策させた王は、広く人々を啓発する意図で、まるで演劇のように人々の心に訴える庭園を望んだのではないだろうか。王はツァルスカイセローの計画を研究し、数年後フランスのプチ・トリアノンの計画も入手した。王は1783

～1784年のイタリア・フランス旅行で受けたインスピレーションと書籍をもとに自身で計画案を練ったのである。

1780年にイギリスを含む外国研修から帰国した造園家ピーベルがアーデルクランツを引き継いで数多くの計画案を作成し、グスタフ3世はピーベルの鳥と水路の案を採用した。1783年に王がイタリアで購入した数々の複製像が後に芝や木立の中に配置された。しかし、訪問者を驚かせる建造物や記念碑の計画があったものの、古代北欧をモチーフとしたゴシックタワーのほか少数が実現しただけであった。1790年代にピーベルが設計施工したモニュメントホルムにはグスタフ3世の胸像を置く予定だったが、台座だけが残っている。なお、台座からロココ庭園までのピスタ(眺望)、モニュメントホルム周辺のボスケにバロック庭園の要素がみられる。

#### 5—複数の庭園様式が残った理由

その謎を解くにはドロットニングホルムの地形が鍵となる。1680年頃、バロック庭園の北側には整形の池が掘られ、構想に終わった1661年と1681年の計画図にも池が描かれている。ここはもともと排水の悪い沼地であった。

まず、バロック庭園には噴水や滝に水を供給するため、高過ぎずかつ排水可能な土地が求められ、沼地ではない低地が選ばれた。次に、中国館が沼地を避けたバロック庭園の南斜面に建てられ、その周りにロココ庭園が建設された。最後に建設された英国庭園は、池を設置するために沼地が適していた。このように、それぞれの立地要件が異なったため3つの様式が残ることになったのである。もしも、ドロットニングホルムが狭く起伏に乏しい土地だったとしたら、これら複数の庭園様式は残らなかったに違いない。

英国庭園を建設しようとしたのはグスタフ3世の個性である。しかし王の芸術への志向は、母ロヴィーサの影響が大きい。強い個性を持つ王とその母がいたからこそ、複数の庭園様式が残る庭園となったといえるだろう。

#### 6—庭園のその後、そして今

ドロットニングホルムは17世紀以降、国賓の接待に用



■写真12—ガスバーナーによる除草・殺菌 ■写真13—中国館

いられてきたが、19世紀前半頃から使用されることが減り、宮殿の一部は崩壊しバロック庭園は荒れ果てた。その後、19世紀末から1960年代にかけて、バロック庭園の噴水や滝の復旧に力が注がれた。

現在、庭園が最も華やかだったグスタフ3世の頃を目標に、復旧作業が進行している。菩提樹並木は上部を平らに、下部をアーチ状に刈り込んだ姿に戻すため、段階的な再生を継続している。苗木は効率良く育てるため、暖かいドイツの苗園を利用した。また、土壌が悪い場所には客土を行っている。バロック庭園のボスケは昔の高さ3mに戻すため成長させている途中である。生きている植物が相手であり、終わりのない努力が必要である。

樹木の刈り込み延長は35kmに及び、王室の庭師8人が担当している。自動鋏の利用やガスバーナーによる除草・殺菌などの省力化・効率化に取り組んでいる。

1981年以来国王一家が居住する宮殿の大部分は一般に公開されている。宮殿や中国館は国賓の接待に利用され、劇場では夏にオペラやコンサートが催される。

そして今、歴代の王妃や王が作り上げた宮殿・庭園は、世界の人々に王室の歴史・文化・芸術を伝える役割を果たしている。庭園は一年中利用できる憩いの場として市民に親しまれている。

- <参考文献>
- 1) [ドロットニングホルム宮殿 大苑園と公園] Catharina Nolin (庭園部分) 1997 政府管轄機関ドロットニングホルム宮殿管理局
  - 2) [Drottningholms slottspark] Catharina Nolin 2000 STATENS FASTIGHETSVERK
  - 3) [FRÅN VASA TILL BERNADOTTE] 1984 KUNGL.HUSGERÅDSKAMMAREN med Bernadottebiblioteket
  - 4) [物語スウェーデン史] 武田龍夫 2003年 新評論
  - 5) [北欧悲史] 武田龍夫 2006年 明石書店
  - 6) [ユネスコ世界遺産7 北・中央ヨーロッパ] ユネスコ世界遺産センター監修 1997年 講談社
  - 7) [世界の宮苑] 岡崎文彬 1991年 養賢堂
  - 8) [庭園の美・造園の心] 白幡洋三郎 2000年 日本放送出版協会
  - 9) [庭園の詩学] ドミトリー・S・リハチョフ著 坂内知子訳 1987年 平凡社
  - 10) [ロシア庭園めぐり] 坂内知子 2005年 東洋書店

- <取材協力・資料提供>
- 1) KUNGL.HOVSTATERNA STÅTHÄLLARÅMBETET DROTTNINGHOLMS SLOTSFÖRVALNING
  - 2) Atsuko K Sandberg (通訳)

(写真提供: P12上、筆者  
 写真1、4、9、13、松田明浩  
 写真2、3、5、7、8、11、藤井千晶  
 写真6、10、塚本敏行  
 写真12、岩田剛彦)

図1: 現地の案内板より